コロナ禍におけるIT環境の変化と今後の展望

西本祝福

大阪府済生会中津病院　医療情報室IT推進課　課長

（1）コロナ禍において求められたIT環境

新型コロナウイルスの感染拡大を受け，感染を防ぐ手段として「人と接触しない方法」を実現すべく，世の中では急速にIT環境の変化が生じた。当院においてもその波は例外ではなく，世間に歩調を合わせるように迅速な変革を求められた。

その中で当院が整備したIT環境は主に次の通りである。

- Wi-Fi環境の拡大
- タブレット端末の導入
- オンライン会議の環境整備
- VDIS（Virtual Desktop Infrastructure Service）の拡大

（2）Wi-Fi環境の拡大

これまでは業務用としてのWi-Fi環境のみ整備されていた。しかし新型コロナウイルスに感染された入院患者に対して，患者自身のパソコンやスマートフォンを用いて無料でインターネット環境を提供することで，容体が落ち着いた後に少しでも充実した入院生活が過ごせるようにと考え，Wi-Fi環境の利用拡大を行った。

（3）タブレット端末の導入

感染者との接触を可能な限り避けるため，従来のような対面での面会や説明を行うのではなく，タブレットの画面越しにやり取りを行うこととした。これまでは電話など音声でしかやり取りができなかったが，画面越しに互いの顔を直接見ながら会話を行うことができ，より深いコミュニケーションが取れるようになった。

（4）オンライン会議の環境整備

これまでは院内の会議室で打ち合わせなどを行っていたが，院外にいながらでも会議が行えるようオンライン会議の環境を整備した。各会議室にネットワーク環境を整備し，パソコン，大型ディスプレイ，カメラ，マイク，スピーカー等の必要機材を新たに導入した。

また，対外的な打ち合わせだけではなく，一堂に会していた院内での職員研修時においても各会議室，部屋に分散してオンラインで実施するなど，極力対面での接触を避けるよう様々な用途で用いられている。

（5）VDISの拡大

新型コロナウイルスに感染したが症状が安定している軽症な方や濃厚接触者など，病院に出勤できない職員の業務が滞らないように，自宅から院内のシステムを使うことができるVDISの利用を促進した。

VDISはこれまで主に地域の医師がセキュアなインターネット回線を通じて，紹介患者に関する情報を利用，閲覧する場合や，システム管理者が緊急時のシステム対応ならびにシステムメンテナンスを行う場合などで利用を広げてきた。しかし，今回のコロナ禍において，テレワーク（在宅勤務）やBCP（Business Continuity Plan）対策としても対応できたのではないかと考えている。VDISは汎用的な仕組みであるが故に，使い方が限定されないのが特徴であり，それが最大のメリットと考えている。

（6）今後の展望

コロナ禍がきっかけとなり，IT業界では様々な変革が加速度的に起きている。業務内容や働き方に関するIT化の流れは今後も進んでいき，次々に新たなサービスが創出される。

しかし，ITはあくまでも「道具」であり，使い方次第では良くも悪くもなるものである。IT推進課としては，常に適切な「道具」を模索し，提案，導入するだけではなく，その「道具」の使い方を周知し，職員にITリテラシーを高めることが大きな役割であり責務であると考えている。

オンライン会議の環境整備

受付け：令和4年6月20日